

戀姫首父

九

駒が森の波

〔解題〕安永四年九月廿五日から江戸の藤摩外記座初演。作者は松貢四・吉田角丸。江戸新材木町二丁目の材木商白子屋庄三郎の養子又四郎の妻お熊が手代忠八と姦通して又四郎を殺さうとしたが未遂に終つたのを、大岡越前守の裁断の結果、享保十二年二月廿五日にお熊は鉛が森で死罪に處せられた事件を材料として脚色したもの。

家運の傾いた城木屋では、金のために一人娘のお駒に喜蔵といふ誓を取らねばならぬ破目に陥つた。然るにお駒は髪結新三と戀仲であつたが、才三はもと侍で、家寶の茶入詮議のために身をやつして居るのである。而してその茶入が喜蔵の手にあるを知つたので、結婚を利用してお駒にその取戻しを頼む。處が一方に於て兼てお駒に横戀慕の番頭丈八は、目的貫徹のために喜蔵の毒殺を勧めたので、お駒は才三と添はうが爲に夫を毒殺す

る。そして萬事は鈴が森の段に於て解決するといふ筋。美しいお駒が刑場へ引かれる時、黄八丈を着て居たの

に因んで外題名をつけたのである。曲輪の段、道行夢路の二つの雁、屋敷の段、祭の段、城木屋の段、評議の

段、鈴が森の段より成り、その中城木屋の段と鈴が森の段とが名高い。

この時才三の人形は吉田冠三、お駒は吉田清五郎で、城木屋の段の「ソリヤ聞えませぬ」の條の豊竹筆太夫の
クドキが大好評で、諸人が口真似をして、お駒の淨るりは大流行であつた。「闇の夜にお駒とお駒行き當り」の
川柳はこの情況をよんだのだといふ。

歌舞伎では翌安永五年三月三日から中村座で興行され、爾來江戸の歌舞伎に於ても大いに行はれ、書替も出
来、また豊後節の淨るりにも多くの作曲を見るに至つた。

三重へ急ぎ行く。地人の身の。フシ捨て所廻つて以上オ、四度見た。が扱て美し うも知れぬと。
地噂とりく／＼ロ々に。
とや名にふりし。鈴ヶ森の所刑場所。い娘ちやわい。あれをころつとやると あんまり待つて寒なつた。鮫洲の茶屋
青竹にて矢來を構へ。邊りにきらめく 言ふはあつたらものぢやないかいの。 で一杯せう。サア／＼ござれと打連れ
拔身の鎌。けばれの役人馳せ詰ひ。科本 イヤ／＼。何ほ顔が美しうても心は鬼
人今やと待ちかけしは。この世からな ぢや。丙午ぢやあるまいし。男を殺す 埋子を思ふ闇より間に目も分す。タキ
る地獄の責め忌はしくも亦。恐し。といふ事が。どこの國に力あるものぢ 只さへ暗き父親の。手を引く妻も諸共
地哀れ見に寄る諸見物。あそこや爰に やない。オイ／＼。さう 一途に に涙に見えぬ道筋を。現ともなく走る
立集り。調何とこの科人もモウ來さう はしやんな。女が男を殺すとは。モよ とも。夢路を歩む。心地して漸う。かし
なものぢや。おれは牢屋を引出すと直く／＼堪忍のならぬ譯。ありや間男お こへ迎り著き。地見れば嚴しき竹垣に。
ぐに通り町へ駆抜け。それから河岸へ つとどつこいしよ。ヤ聞女房事であら さも恐しき抜身の鎌。あれで我が子を

殺すかと。思へば氣も消え心消え。おりやまだ以前のお主へは忠義とも思助かるとの。誓ひは嘘か偽りか。詞エテわつとばかりに泣出する。詞コレ嗚。ふが。そなたは嘸ぞや悲しうて。このんな事知つたら。あらゆる神や佛様御爰がもう鉛ヶ森か。今の其方の泣聲は。

モウお駒は殺されたか。コレ／＼早う聞かして下されと。地フシ問へば女房が涙聲。調イエ／＼まだ娘は來やせぬけれど。きびしい構へを見るにつけ。可愛い娘を殺すかと。地思へば胸も張裂く苦しみ。わたしは身も世もあられぬと歎けばいとゞ父親は。詞オ、道理ぢや／＼はやい。今朝も門を引かれると聞いた時。駆出で逢ひ度う思つたれど。近所の衆に留められて。内で泣いてばつかり居たわいの。今日が親又一つには娘めが。言ひたい事もあるならば。聞いて迷ひが晴してやりたさ。忍してたもコレ。女房ども。地日頃念ね表具お主の爲とはいひながら。花の様じ奉る。お宗旨の彌陀如來。只一心一意と恩召し。娘を救うて下さるまいと。な子を殺す。おれが心を推量しや。や向に頼みをかける驗には。この世から如來様ばつかり念じて居たのが。今まで

安永五申三月二日ヨリ

中村勘二郎座操狂言役人登場

城木公兵衛 市川圓翁 一城志乃女 岩井良之八
萩原千秋 畠東長節 一城志乃女 岩井良之八
佃兵吉右衛門 中村勘太郎 一品月院 中村里助
久代太八 大谷友左衛門 城志乃女
一城志乃女 岩井良之八 一品月院 中村里助
左報ね万八 二角 一品月院 中村里助
才子小金舟 二角 一品月院 中村里助
寄庵鳥人間内 山科山助 一品月院 中村里助
夜翁人見助 市山信之助 一品月院 中村里助
二角人 囲助 中村勘太郎 一品月院 中村里助
中村仲菴 中村仲菴

役人替名「丈八昔娘戀」

庄兵衛が憎からう。堪忍してたも。堪信心中したら。ちつとは利生もあらう。

は悔しい。未來は奈落へ落ちるとも。／＼來るわとフシ立驕ぐ。地跡を追ひ
娘が助けてたべ。調南無如來様。南／＼下女男。調ヤア旦那様。お内儀様。
無如來殿。エ、如來め。サ、ス、斯う歎きはお道理さりながら。お怪我があ
いふがお腹が立たば。どうぞ娘が助か
るやう。地お慈悲ちや願ひ上げますと。
愚に返つたる親心。母は猶更正體な
思ふ事。叶はねばこそ憂き事の戀と
く。才三殿が盜まれし茶入とやらが出
るならば。助かる筋もあらうかとそれ
ばかりを楽しみに。今日よ翌日よと
待つ甲斐も情ない今日の今。死ぬる娘
が心の内思ひやつていぢらしい。病煩
ひで死んでさへ子を先立てし親の身
は。悲しうてならぬもの。説難蝶よ花
よと撫でし子を。科人にして殺すとは
よよく／＼前世の因果かと。狂氣の如
く身を問え。夫婦手に手を取りかはし。
刑にも行はるべきを。お上の慈悲を
絶え入り消え入る憂き涙餘所の。見る
以て。死罪に仰付けらるゝ。有難く存
見物。そりや科人がもう爰へ。そりや
何事も皆私が心でかかる身の罪科。露
は悔しい。未來は奈落へ落ちるとも。／＼來るわとフシ立驕ぐ。地跡を追ひ
娘が助けてたべ。調南無如來様。南／＼下女男。調ヤア旦那様。お内儀様。
無如來殿。エ、如來め。サ、ス、斯う歎きはお道理さりながら。お怪我があ
いふがお腹が立たば。どうぞ娘が助か
るやう。地お慈悲ちや願ひ上げますと。
愚に返つたる親心。母は猶更正體な
思ふ事。叶はねばこそ憂き事の戀と
く。才三殿が盜まれし茶入とやらが出
るならば。助かる筋もあらうかとそれ
ばかりを楽しみに。今日よ翌日よと
待つ甲斐も情ない今日の今。死ぬる娘
が心の内思ひやつていぢらしい。病煩
ひで死んでさへ子を先立てし親の身
は。悲しうてならぬもの。説難蝶よ花
よと撫でし子を。科人にして殺すとは
よよく／＼前世の因果かと。狂氣の如
く身を問え。夫婦手に手を取りかはし。
刑にも行はるべきを。お上の慈悲を
絶え入り消え入る憂き涙餘所の。見る
以て。死罪に仰付けらるゝ。有難く存
在する。果ては斯うした淺ましい此の世か
らなる劍の山。身を切り裂かれ憂き恥
を。曝すも定まる因縁づく。約束ごと
つては猶大事。地マア／＼お出でと手涙
を引いて暫く片方にフシ介抱す。地
夫を殺す大罪人。さぞ憎いやつ大膽者。
義理との諸手綱。二上り不便やお駒は夫
の爲。かゝる憂き身のしばり繩。首にかけたる水晶の。珠數の數さへ消えて行
く。哉廻居所の羊の歩みより。はかな
徒者と皆様の。お憎しみもあらうけ
れど。地いふに言はれぬわけあつて。
夫殺しの科人と。死恥さらす身の因果。
く。哉廻居所の羊の歩みより。はかな
不便と思し一遍の。御回向願ひ上げま
す。調世上の娘御様方は。このお駒
ひ。調最前屋敷にて役人中より申し渡
す。果ては斯うした淺ましい此の世か
らなる劍の山。身を切り裂かれ憂き恥
を。曝すも定まる因縁づく。約束ごと
つては猶大事。地マア／＼お出でと手涙
を引いて暫く片方にフシ介抱す。地
夫を殺す大罪人。さぞ憎いやつ大膽者。
義理との諸手綱。二上り不便やお駒は夫
の爲。かゝる憂き身のしばり繩。首にかけたる水晶の。珠數の數さへ消えて行
く。哉廻居所の羊の歩みより。はかな
徒者と皆様の。お憎しみもあらうけ
れど。地いふに言はれぬわけあつて。
夫殺しの科人と。死恥さらす身の因果。
く。哉廻居所の羊の歩みより。はかな
不便と思し一遍の。御回向願ひ上げま
す。調世上の娘御様方は。このお駒
ひ。調最前屋敷にて役人中より申し渡
す。果ては斯うした淺ましい此の世か
らなる劍の山。身を切り裂かれ憂き恥
を。曝すも定まる因縁づく。約束ごと

一世と限る二親の。もしや群衆の其のた。逢ひたかつた逢ひたかつたわいの中に。見えはせぬかと伸上り。伸び上な。オ、逢ひ度い筈道理ぢや〜。親よりも泣き腫れて見え分かぬ。心を思ひ諸逢ひたう思やる。ア、コレ〜母様。見物濡れぬ。シ袂はなかりけり。地群もう言うて下さんすな。聞く程戀しい

集押分け二親は。竹垣に取付き縋り。

床しいお人の。お顔が目先にちら〜

御出世なさるを冥途から。樂しんで居りますと。よう言うて下さんせえ。え。

コレ〜お駒や。父様もこの母も。と。片時暫時も放れぬわいな。放れぬ親子一世の暇乞ひちやもの。来て居いわいな。私が斯ういふ心から。お年寄でよいものかいなう。来て居いでよいられたお二人へ。こんな歎きをかけま ものかいなう。コレ〜喚。嘸や此のする。必ず〜泣かすとも娘でも何で 頃のうき苦勞。娘が顔も。マ瘦せたでもない。アリヤ^{アリヤ}前生の敵ぢや。憎いやあらう。どの様にして居る事ぢや。エつ不孝者と。思切つてふつつりと。歎かりが悲しいと。今死ぬる身の今迄エおりや顔が一目見たいわい。おりやきを止めて下さんすが。少しは冥途も。おぼこ娘のあとなさを。思ひやり顔が一目見たいわい〜。イヤ〜わの罪じし。私が死んだ其の跡でも。つゝ二親は前後正體うち倒れ。せき上しやこな様の目の見えぬのが羨しい。必ずくよ〜思うて。煩うて下さんすげ〜叫び泣き。音は濁邊に打寄せるみすぼらしい娘が形。見てゐる母が此なえ。ソレ〜。其の様にしをらしい浪に。浪増す涙なり。果てはあらじと胸は^は裂けるわいのとどうと伏し前孝行な事いうてたるもの。くよ〜下部とも。時刻移ると引立つ。二人後。不覺に取亂す。調父様。母様。よ思はいでかいなう。思はいでかいなう。の親は竹垣に隔てられたる親子の別う來て下さんした。わしや逢ひたかつう。何の跡に片時も生きて居られう。れ。見物群集は日々に宗旨々々の^{しき}フシ

手向草。^{たむけぐさ}。地折もこそあれ才三郎。丈八 命赦免の状。御披見あれと差出せば。婦。夢に夢見し心地して フン悦び涙ぞ。に繩をかけ。群集押分け矢來の内。^詞 地彌藤治取つて押開き。^詞 成程々々。道理なり。^地 お駒が繩目とく／＼と。御預けの茶入の盜賊喜藏に紛れなき紛れなき赦しの趣。親の敵とあるから 解けて結びし戀娘。千代も變らぬ御恵由。この丈八が白狀故再び茶入も我手は喜藏丈八兩人は。才三郎の心任せおみ。重ね。重ねて黄八丈。^{さはぢやう}昔語りを今に入る。又喜藏丈八兩人は此の才三郎 駒は直ぐに二親へ。御赦免なるぞとあ爰に。傳へ／＼し筆の跡世々に。そのが親の敵。お上へ委細申上げ。お駒がりければ。^地 はつとばかりに庄兵衛夫名をいちじるし。